

するとき、天地雲泥の差があるのには肅然しゆくぜんとして襟を正すのみである。あの未曾有の動乱の中、鮮満の地において、非命に斃たおれ非業の最期を遂げられた幾多の人々には、大變申し訳のないことであつたと思う。謹んで哀悼の祈りを捧げ、御霊安かれと祈る日々である。五十九回目の終戦記念日を迎え、平和と国防・国益について考えること多き毎日である。

この拙き手記を慈愛深き亡き父母の御霊に捧げる。

敗戦がもたらした出会いに
生かされて！

東京都 遠藤 節子

一 北京への道

私の父は明治十七（一八八四）年に京都郊外の造り酒屋の長男として生まれ、明治三十七、八年の日露戦争に従軍し、激戦だった旅順戦にも参加したが、英語が話せたので、専ら後方活動に任じていて無事復員し、その後直ちに渡満して日本の租借地となった関東州の旅順都督府に勤務した。まもなく中国語研修を命ぜられて北京に留学し、その後、奉天警察庁に転出したが、思うところがあつて辞職。朝鮮総督府の要請で鮮満国境の新義州警察学校教官に就任した。

母は明治二十九年に相馬藩士族出の岡田某の次女として生まれ、高等小学校卒業後、福島県の教員養成所を出て小学校教員として勤めていたが二